

## ■■ おとら狐Ⅱ ■■ ===⇒おとら狐の話

また話が前の婆さんのことに戻るが、婆さんの家の裏は一帯の御料林（北山御料林）で、非常に山が深かった。おとらが婆さんに取り憑いていた当時、この御料林の山中に住み馴れている黒毛の牡犬が<sup>さかり</sup>あって、遊牝になって毎夜婆さんの家の牝犬のところへやって来た。昼間姿を見せぬことが多いけれども、夜分床の下へ来るのだそうで、それを家のものは誰一人知らぬのに、おとらの婆さんだけは、知っておって非常に怖がったそうである。

また御嶽講の行者などを甚だしく嫌うて、これを招いて祈禱をさせた日などは、行者が帰った後で婆さんのおとらが歎息しては、あいつのいる間裏口から遁げ出して帰るのを待っていたために、こんなに体が冷たくなったなどと、顫えてたそうである。この婆さんが亡くなる前の日などは、一年余も寝ていたものが、座敷中乱痴気騒ぎをやって、一晩踊り廻ったということである。



おとら狐が血気さかんな若い者にも憑くことは前にも言うたが、維新前の頃私の家にいた男も、一七のときにおとらに取り憑かれて、〔口が光って眼が吊るし上がって〕相貌がまるで狐だったということである。べつに床について寝ているというのではなく、ただぶらぶらしていたそうであるが、路などで突然出逢っても、それは物凄い様子であったと言う。二年ばかりして平常に復し、その後伊勢の方へ行って船頭になったという話である。

私の友人の母は、明治四三年に病気のため名古屋の好生館に〔病院〕に入院して手術を受け、その結果が思わしくないので、八名郡舟着村の自宅に還って療養しているうちに、このおとら狐に取り憑かれたと言う。友人は豊橋に出て銀行の書記をしているくらいの人なので、土地の人の言うおとら狐などは、初めはまるで信じていなかった。親戚のものや兄弟たちが、毎日枕元について看病していたのであるが、だんだん病人の様子が変になって来る。ときどき妙なことを口走るのを、最初は少しも意にしないでおったところ、食物としては牛乳、鶏卵などのほかは取らせなかったにも拘らず、病人の排泄物を験すると、柿の種子や栗の皮、唐黍、その他名も知



らぬ山にある果物などが、多く交じっているので漸く疑いを起し、村の人の勧めにしたがって修験者を招いて、祈祷もさせてみたが効がなかった。例によって左の眼からは絶えず目やにをだし、左の足が痛むことは話の通りであった。

よく晴れた日などは、母親が少し風に吹かれてみたいと言うので、たすけ起して縁先の風通しのよい所に寝かせておくと、足の痛みも幾分か軽く、目やにも一時止まって、がっくりとした様子をして、また夕方になると、あの厭な婆さんが来るので、それが厭だなどと述懐したそうである。

九月の末になって友人の母は亡くなった。決して里人がおとらを扱うような粗略はしなかったが、これが狐かと思うと情けない気分がしたと言う。〔それに、後で近所のものの話を聞くと、友人の家の周囲には狐が絶えず遊んでいるのを見かけたそうである。〕これは友人が母の死んだ翌四四年の春、私に物語ったところの言葉である。

こういう例は非常に多く聞くところであるが、里人の多くは家のもののおとらに憑かれたことを隠すために、たしかな話を聞くことは少ない。ここに挙げた分は、直接看護をした人、またはつき添うていた人の話ばかりで、他人の憶測の類はすべて取り除いたのである。

おとらは憑くとは言いが誰もその姿を見たとは言わぬ。私の家の隣家である日の朝、鶏が狐に襲われたことがあった。尾だけ取られて体は無事であったが、その当時村の婆さんに憑いていたおとら狐がその婆さんの口で、鶏を取りそこのうて残念だったと、聞いたことがある。しかも隣家の親爺の見たのは、普通の狐であったというから、これから推して考えると、おとらもただの狐であろうか。

またおとらの憑いているという病人に、貴様の体はどうしたなどと尋ねると、どここの茶の木の陰において来たとか、または藪の中にいるなどと答えると言う。これから考えると、かれもやはり軀のあるもので、前に述べた娘の薪の上に乗って重かったという話をみても、重量もあるらしいのである。おとら狐の憑いている病人の家のものは、狐と同棲しているので、衣類の袂に狐の毛があると言う。私らの少年の頃はこの話を信じて、よく袂の中を調べてみたものである。白い毛があるなどと言うた。そうすればおとらは白狐であろうか。あるいは白い狐で、背に井桁の  印があると言う。〔山吉田村満光寺の小坊主朝吉が、十五年前に実見したのは、白狐で正しく  の印があったと言う。〕しかしまた一説には、雉子猫のような毛色だとも言う。ともに実見者の談だと伝えていて、如何とも定めかねる。

おとら狐に取り憑かれたものは、食事をするとき、その食物が咽喉を通して食道へ入らずに、肩に沿うた部分を通るなどとも言う。またおとらが病人を離れる時は、コンコンと鳴いて家のものに今去ることを告げるとは、一般に言うておるところである。

そうすると、おとら狐は片眼片脚の白狐、または雉子猫のような毛色で、形は普通の狐の大きさにコンコンと鳴き、病人に憑くときは軀を他処に匿して、魂だけでやってくるものと言うことになる。食物をどうして自分の養いにするかはなんとも不明で、〔あるが、前に掲げた渋川の某女に憑いた時は、家のものがおとらだと言ったとあって、腹を立て、幾日も食事をしないので、家のものが心配して、物陰に呼んでだまして聞くと、味噌部屋の豆を食べていると、しゃべったので、検めてみたら、味噌の中の豆は綺麗に食べて無かったという。〕結局はいわゆる狐に憑かされたような話になるが、私はその理由がわからず、ただこんな不可思議な話として、書き列ねておこうかと思うのである。

おとら狐が片足である理由として、前に述べた信州犀川の話と、まったく別な話をする人もある。以前長篠城跡の倉屋敷に、林藤太夫という日置流の弓の名人が住んでいた。土地の人に望まれて弓術の奥儀を試み、おとら狐の左の足を射た。そのときからおとらは、片足がびっこになったというのである。びっこになるまでは、城の近所のものばかりに憑いていたが、それからは他の部落にも往って憑くようになったと言う。林藤太夫は長篠の合戦のとき、徳川方について働いた林藤助光政の後と称し、天明元年に七九歳をもって、歿した人である。七、八年前頃までは、その家屋敷が残っていた。

おとら狐の本元たる長篠城附近の土地、すなわち長篠の西組では、おとら狐を忌み怖るるところから、特に伏見の稲荷を勧請して、部落の入口ニカ所に小宮を建て、以後組内へおとらの入らぬように、信心をしたと言い伝え、そのために西組だけには、憑かれるものがなかったということである。今日でも一ヶ所だけは、祠の跡が遺っており、自然石に伏見稲荷大明神と彫ったものが立っている。年号等はないからいつの頃のことかわからぬが、西組の旧家林重三郎の宅に、古くからある伏見稲荷に、享保二年勧請の文字のあるのを見ると、組内で迎えたのも同じ頃だろうかと思う。故老の言い伝えにも、百七八十年前のことのように言っている。〔別の説に、橋場の橋の上で、医王寺の狛犬が狐と問答して、再び西組へは入らぬ誓願をしたと

も言う。]

おとら狐は何のために人に取り憑くのか。狐は墓場に往って、亡者に頼まれて来て人に憑くとこの辺では言う。亡者がこういう怨みがある、よろしく頼むと言えば、悦んでコンコン鳴いて早速往ゆく。供養も十分で何も不足はないと答えると、怒って墓所で糞をする。故に墓所で狐の糞のあるのはよいことだなどと言っている。おとらもかくの如く亡霊に頼まれて来るのか、はたまた単に食につくためであるのか。実際はただ病人に憑いて、下らぬことばかり口走りものを食うだけで、これぞという特徴を認めることが出来ぬようである。

おとら狐に専門のわが地方の修験者は、おとらは姿のない風のような一種の気であると、さももっともらしく説いている。村の人はこの狐は人間に取り憑けばその肝を食い、そのかたわら普通の食物も食うのだと言う。もっともわけのわからぬ話である。

おとら狐には、通例狐の話によくある何かに化けたという話がない。また人を誑たぶらしたという話も聞いたことがない。ただ人に取り憑いて食を取るというばかりである。

一種の風土病ではないかと言うた人がある。〔一時的に〕精神に異状を来たしたのだと言う人もあるが、要するに地方の医師にもよくはわからぬと言う。

おとら狐の話は、明治三六、七年頃までたえず聞いていたのが、その後しばらくその噂がなかった。ところが四三年になって、私の友人の家に右に述べたような一条が起こった。しかしこの一条だけで、他にはさらに聞いたことがな〔かったが、この本が、大正九年に出版された当時、長篠村西組の某の娘に憑いている話を聞いた。西組には、昔憑かぬはずのものを、何で憑いたと責めたてると、いったん豊橋へ嫁いでから憑いたと言っていたということである。そして、俺は、長篠おんとら狐、それが証拠にや片目にちんば、と歌を唄って座敷で踊っているということであったが、その後全快したという。それから話は聞いていないが、この頃、長篠附近の噂には、早川という男が、あんなおとらの本を出したので、それで憑かなくなったのだと言っているということである。〕い。その後はおとらもどうなったのであろうか。